

異世界転生騒動記

5

高見梁川

Takami Ryousen

ILLUSTRATION: りりんら

ジルコ

陽気なベテラン傭兵。
バルドの下で傭兵団を
統率する。

**アーノルド・
ボーフォート**

マウリシア王国の
大貴族で国王の叔父。
70歳を過ぎてなお、
権力に執着する。

**ルイ・
フェルディナン・
ハウレリア**

ハウレリア王国の国王。
マウリシア王国に
深い恨みを持つ。

**マティス・
ブラッドフォード**

バルドの父イグニスの古い戦友。
娘はサンファン王国の王太子妃。

**フランドル・
ガスティン**

ハウレリア王国の
大將軍。過去に
数々の武勲を
挙げた名将。

**アルフォード・
ランドルフ**

シルクの父で、
娘には滅法弱い。
マウリシア王国の
十大貴族に数えられる。

**マゴット・
コルネリアス**

「銀光」と呼ばれる
バルドの母。
先の戦争で活躍した
最強の傭兵。

**バルド・アントリム・
コルネリアス**

本編の主人公。
雅晴と左内の魂を有する。
アントリム領を治める子爵。

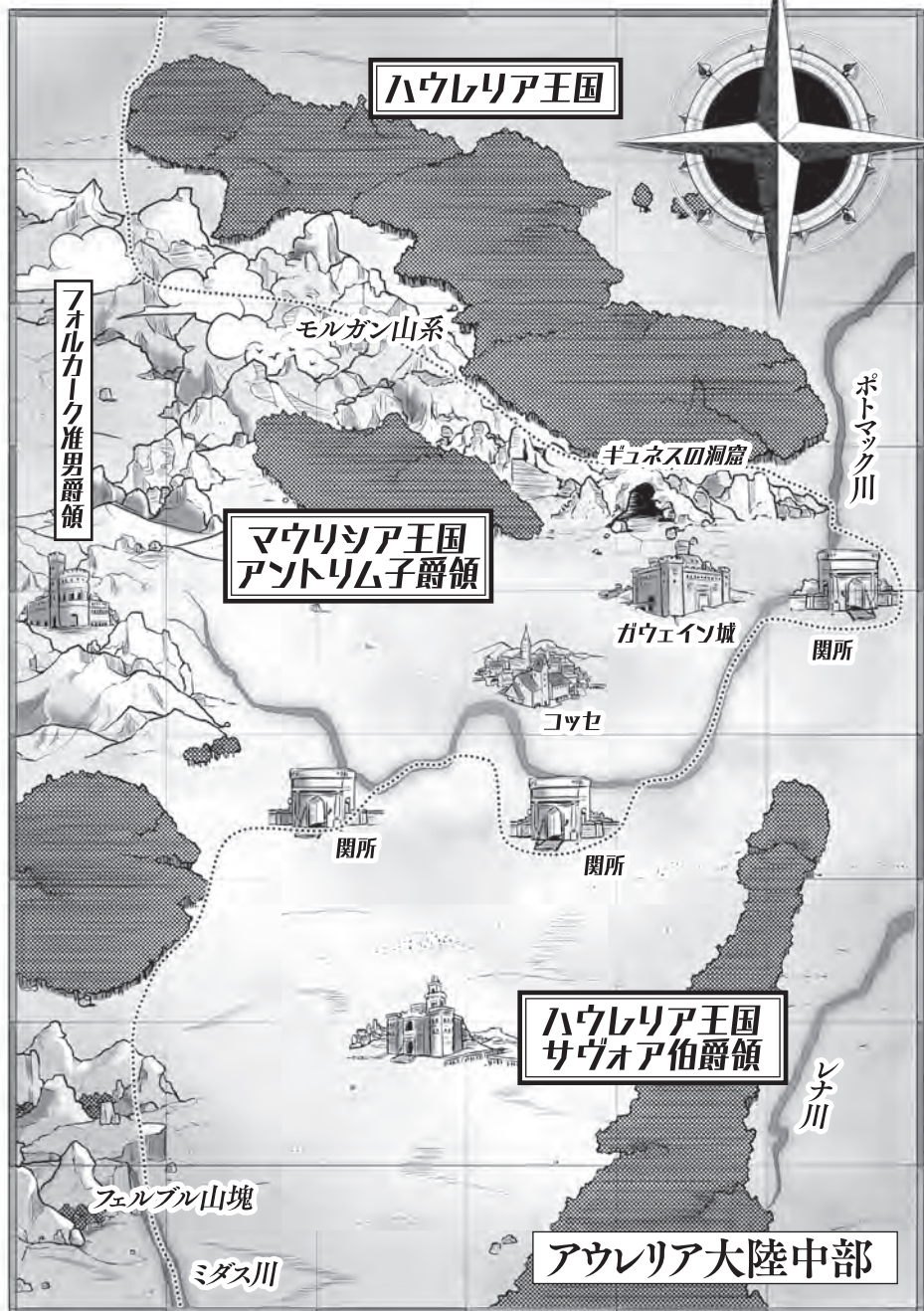
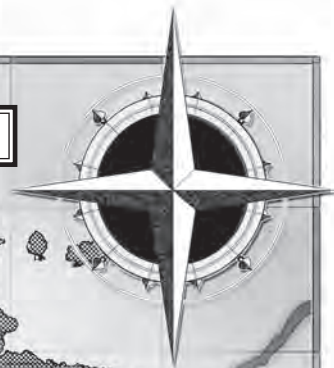
シルク・ランドルフ

騎士学校でのバルドの同級生。
亡き母は隣国トリストヴィーの王族。



第一章

開戦前夜



新しく領主に着任したバルドによって、未曾有の発展を遂げるマウリシア王国アントリム領。そこに潜入した仇敵ハウレリア王国の密偵たちは、そのことごとくが始末された。しかし、捨て身の戦術に出た密偵の一人ソバト・ドレーンは、己の命と引き換えに、その任務を果たそうとしていた。

ソバトの遺骸とともに、故郷であるサヴォア伯爵領に帰還した仲間のダリオは、この十年の間にすっかり肥えて、肝っ玉母さんと化していた義妹に息子を預けると、伯爵の私邸へ足を向けた。サヴォア伯の抱える密偵のなかでも、ダリオの存在を知る者は特に限られており、伯爵に面会するためには正規の手続きを取らざるを得なかったのである。

「伯爵さまが御面会になる。ついて参られよ」

門衛を訪ねてから案内の執事がダリオを迎えに来るまでに、数時間のときが必要であった。ことがことだけに、入念なチェックがされたのであろう。促されるままに、ダリオは執事の後に付き従った。

「――そなたがダリオか」

「御意」

薄暗く、貴族のものとしては狭い執務室で待ち受けていた、サヴォア伯爵フェルナンドの表情は沈鬱であった。

その理由がダリオには痛いほどによくわかる。同じ胸の痛みを、故郷に戻る道すがら、自分も常に感じ続けてきたのだから。

「ご苦労であった。ソバトは任務を果たしたのだな？」

「はい。その命を懸けて、見事情報を持ち帰りました」

「……惜しいことだ。あれは、わしには過ぎた部下であった」

事実、ソバトの力量は辺境の伯爵家には相応しくないほど素晴らしいものであった。

しかしそれは、情報を重要視するフェルナンドの識見が高いことの裏返しでもあり、ソバトは決して仕える主を間違えたとは思っていないだろう。

だからこそ、ソバトは何のためらいもなくフェルナンドのために命を捨てたのだ。

爵位を継ぐ前から仕え続けてくれた老臣の死は、サヴォア伯爵家にとっても、フェルナンドにとっても無視することのできない痛恨事であった。

「……そなたも長年、敵地で苦労をかけたな」

「お言葉だけで身に余る光栄でございます」

「では早速だが、ソバトが遺してくれたものを見せてもらおうか。決して無駄にするわけにはいか

んからな」

「御意」

ダリオはフェルナンドの前に、透明な水晶眼球を差し出した。

「これは……？」

「ソバトの義眼です。文書に残せば遺体を確認されたときに露見する可能性がありますので、我々間諜は、本当に重要な情報は身体に刻むのです。胃の中に呑み込むこともありますし、骨に彫り込むこともあります。ソバトの奥の手が、この義眼だったのです」

「……そうか」

あまりにも苛烈な闇に生きる者の覚悟に、フェルナンドは二の句が継げなかった。

華やかに戦場を彩る騎士と違い、闇に生きる彼らは、何の名誉も表立って与えられないのだから。

「忠臣に報いてやれぬ我が身の口惜しきことよ」

「影に生きる者の運命なれば」

地位も名誉も得ることのできない間諜は、騎士などよりもよほど高い忠誠心が要求される。

彼らの任務は言うなれば貧乏くじであるが、誰かがやらなくてはならない必要不可欠なものでもあるのだ。主君のため、故郷のため、己を殺す覚悟のない人間に間諜は務まらない。

ちなみに、バルドが職業的な間諜を組織することを諦め、商人たちを使って集めた情報を分析する体制にシフトしたのは、そうした理由があるからだった。

この観点から見れば、ハウレリア王国の君臣関係のほうが、マウリシア王国のそれよりも忠誠が深いと言っても差し支えなかった。

「この義眼は魔道具であろう？ 魔法士を呼ぶか？」

「いえ、この程度であれば私だけで事足りるか」と

そう言っただリオは、無造作に手のひらを義眼に向ける。

義眼の構造はそれほど複雑なものではない。ソバトの義眼と同じ転写式の魔法式を、ダリオはかつて何度か扱ったことがあった。

「投影」

発動術式とともに、およそ二メートル四方の巨大な映像が二人の前に映し出された。

まず目を引いたのは、領内を警備する兵士の多さである。

これは、アントリムで生活していたダリオにはよくわかる変化であった。

領主がバルドに変わってからというもの、アントリムの兵力は少なく見積もっても十倍以上に膨れ上がっている。

おそらくマウリシア側の国境の要であるコルネリアス伯爵家と比較しても、それほどそんな色合いの兵力を維持していると見て、間違いあるまい。

果たして一介の子爵家にそんな経済力があるものか。

フェルナンドはアントリムの強化の背後にマウリシア国王がいることを、このとき信じて疑わな

かった。アントリムでのバルドの高評価を知っているダリオですら、これに関してはフェルナンドと同意見である。

次に映し出されたのは、国境線に沿って配置された鉄条網。

生まれて初めて見る鉄条網の異形に、二人ともあぐりと口を開けて絶句した。

なんの変哲もないただの針金なのに、防御陣地に利用された場合の厄介さは、一目見ただけで明らかであった。

間違いなく大量の軽傷者を生み、突破するには長い時間を浪費するに違いなかった。

戦いにおいて負傷者の存在は、死者以上に大きな負担となる。

戦場は間違っても衛生的な場所ではないし、薬品も治療師も限られている以上、負傷者という存在はその数に倍する健常者の助けを必要とするからだ。

さらに、鉄条網の背後に見える巨大な石の塊のような不思議な施設と、その施設を繋ぐように張り巡らされた堀。

「……何故堀が陣の中にあるのだ？」

「面目次第もございませんが、私には想像もつきませぬ」

通常、堀とは歩兵や騎兵の進撃を阻むために、陣の前方に作られるものだ。それをわざわざ味方の陣地内で掘る理由が、二人にはわからなかった。

地球における塹壕線の概念は、銃が普及した後、歩兵が身を隠しつつ立射できるようにと考案さ

れたものだ。

未だ銃が開発されていないこの世界では、理解が及ばぬのはむしろ当然であった。

そして攻城用の投石機と思われる巨大な機械が数台、置かれているのが確認できるのだが、これにもフェルナンドとダリオは首をかしげざるを得なかった。

「なぜこんなところに投石機が置かれているのだ？」

「残念ながら……」

城壁の破壊などに用いられる投石機は、攻撃側の使用する兵器であって、守備側が用意するものではない。

見れば見るほどアントリムの守備陣地は、堅固なばかりでなく不可解であった。

普通であれば無視するレベルの疑問ではあるが、ことアントリムに関しては、そうした不可解さの裏に隠された秘密があるような気がしてならない、とフェルナンドは感じた。

あのソバトが命を賭して手に入れた情報の価値は、それほど安いものではないはずである。

「……そして、これが最後になるのですが……」

最後の画像は、ソバトの絶命の瞬間なのだろうか。ブレてはつきりとしないう画像である。

画像の中心には、大きな筒のようなものがあり、それが灰色の岩のような建造物に向かって延びていた。

「これは……なんだ？」

「ただの筒にしか見えませんが……ソバトが着目した以上、きっとなんらかの兵器ではないかと」
仮に兵器だとすれば、弩の亜種であろうか？

しばし考えていたフェルナンドだが、もはや自分の手には負えない、と判断した。

何より、この情報が有効に活用されなかったならば、ソバトの死が無駄になってしまう。
「国王陛下に使者を立てよ！ サヴォア伯爵よりルイ国王陛下に至急言上の儀、これ有りとな」
謎が解決したわけではないにせよ、フェルナンドの心はすでに決まっていた。

アントリムの防衛体制が未完成であるうちにこれを排除しなければ、ハウレリア王国はアントリム、引いてはマウリシア王国征服の野望を諦めなくてはなくなる予感がしたからであった。



「なんとも小面憎い餓鬼よ……」

ボーフォート公アーノルドは、王権を失墜させる第一歩としてバルドを孤立させる自らの策謀が失敗に終わったことを知って、屈辱に顔を歪めた。

今年七十二歳を迎えるアーノルドだが、まるで八十を過ぎているかのように臉は深い皺に蓋をされ、唇はカサカサに乾いてひび割れていた。

枯れ木のようにやせ細った身体からは、彼がマウリシア王国十大貴族のナンバー2である、とい

う覇気は一切窺うことができない。

「ランドルフ家を正面から敵に回すことを嫌がる貴族が多くございまして……小僧を義絶したのは、我が家を含め五家のみにとどまっております」

そう答えたのは、ヘイスティングス伯爵ヘンドリックであった。

おどろおどろしい大仰な身振りや、いかにも嘆かわしいと言いたげな演技に、アーノルドは内心で唾を吐きかけた
いい思いであった。

（役に立たぬ奴だ。たった五家では、政治的な影響力は皆無に等しいではないか）

アーノルドは焦っている。

このまま無為に時を過ごせば、国王ウエルキンと宰相ハロルドは我が世の春を謳歌するであろう。
息子の命を奪った愚かなる王が、名君としてマウリシアの歴史に名を残すなど、決して認められぬことであった。

しかしそれ以上に危険なのは、ハロルドを中心とした官僚の再編成によって、アーノルドを含めた守旧派貴族の権力が削られつつあることだ。

まだ十七歳の可愛い孫に、王国主流派との権力闘争を期待するのは不可能であることを、長年王宮で生き延びてきたアーノルドは十分によく承知していた。

だからこそアーノルドはウエルキンの力を削ぎたい。

そのためには宿敵ハウレリア王国と手を組むことも、吝かではないと思っていた。

「……アントリムの背後に位置するフォルカーク殿は、我らの理想に賛同しております。あの小僧も所詮は袋の鼠にすぎません」

「袋の鼠になるだけでは困るのだ。アントリムが減んでも、王家の力を削げなければ我らに未来はないのだぞ！」

「さ、左様でございますとも。うまくランドルフ家に墓穴を掘らせられれば……」

ヘンドリックの言葉に、アーノルドは若き日のアルフォード・ランドルフの姿を思い起こした。王宮の女性に人気の貴公子として、次世代の十大貴族を代表するとして期待されていた男である。息子の政敵として油断のならない男だと警戒していたアルフォードが、あえてバルドを庇う理由が不審であった。

（アルフォードめ……何を考えている？）

少なくともあの男であれば、ある程度こちらの思惑を読んでいるに違いない。

アントリムを餌にハウレリアに挙兵させ、戦争でマウリシア王家の戦力と財力を削ぐ。

それを防ぐためにはいえ、バルドを義息とするのはやりすぎだ。

それとも、バルドにはそれほどの価値があるともいうのだろうか？

数年前のアーノルドであれば、ここでバルドを味方に取り込もうとするか、もう少し力量を探る時間を置いたであろう。

しかしアーノルドにはもう時間が残されていなかった。

三ヶ月ほど前から腹部に感じる腫瘍が、日に日に体力を奪っていくのをアーノルドは自覚している。長くとも、一年後まで自分が生きていることはあるまい。

この命のある間に、孫に安泰な政治権力を渡さなければ、死んでも死に切れるものではなかった。「もはや引き返すことはできぬ。たとえこの国を売ることになろうとも」

アーノルドが死病に侵されていることを、バルドもアルフォードも知らない。

残り少ない生命を懸け、捨て身となったボーフォート公の策謀は、バルドたちの予想を大きく裏切ろうとしていた。



「今日の気分はどうだい？」

「悪くないわ……バルドもそうだったけれど、うちの子はお腹にいるときからやんちゃで困るわね……」

そう言ってマゴットは、愛おしそうに大きく膨らんだお腹を撫でた。

サバラン商会から紹介された医師は、五十代のよく肥えた女性で、あのマゴットにすら有無を言わせぬ迫力で、マゴットの食事や運動を制限していた。

「いい年齢して脂っこいものはかり欲しがるんじゃないよ！ 子供がオヤジ体型になったらどうす

るんだい！」

「肉を食べずに、どうやって力を出せて言うの？」

「あんたも母親なら、生まれてくる子供のために節制しな！ もう若くないんだから、身体を整えないと子供に悪影響が出るんだよ！」

「ぐぬぬ……」

これが医師でなければ殴りかかりたかったが、その衝動をマゴットは必死に抑えた。

気持ちとはかく、マゴットが出産には高齢なことは確かであり、それが子供に悪影響を与えることは絶対に避けなければならなかった。

「す、すごい……あのマゴットが完全に言い負かされるなんて……」

空気を読まずにイグニスかんたんは感嘆する。

「あんたも嫁の面倒くらいしっかり見な！ あたしの見立てじゃ、ちよいと難産なんざんになるよ！」

「なんだって？」

医師の言葉にイグニスは顔面そうはくを蒼白にする。

生まれてくる子供も大事だが、愛する妻は自分の命よりも大切な存在であった。

まして高齢出産となるのを承知で子供を望んだのはイグニスであり、医師の口から難産を告げられて平静でいられるはずがなかった。

「大丈夫よ……私が負けるところなんて想像できる？」

「君はいつでも私の最強の女神さ……でも苦戦しそうなときは、心配くらいしてもいいだろう？」

甘い雰囲気でお互いに見つめ合うイグニスとマゴット。

「いちゃつくのは後におしっ！」

やれやれ、とばかりに肩をすくめて医師は笑った。

二人ともいい年齢をしているくせに、妙に微笑ほほえましい夫婦である。

実のところマゴットの消耗は通常の妊婦に比べて大きく、そのことは本人が一番良くわかっているだろう。

それでも前向きに笑える気力さえあれば、あとは自分がなんとかして見せる。言葉には出さずに、医師は柔らかな眼差しで二人を見つめた。

とはいえ、コルネリアス伯爵家の戦力の要であるマゴットの脱落は、敵味方を問わずに影響を与えずにはおかなかった。

『銀光マゴットは一個大隊に匹敵ひつてきする』という表現は決して誇張こちやうではない。そして攻者三倍の法則を鑑かんみれば、一個連隊の守備戦力がコルネリアスから失われたに等しいのだ。

さて、敵の不幸は味方の利益となるのが普通であるが、今のハウレリア王国には、いささか困った事情が存在した。

「この好機を逃せと言うのか？」

「……確かに銀光が出産のため身動きできないのはまたとない好機。しかしマウリシア王国に根を張った売国貴族を動かすためには、攻略目標はアントリムでなくてはなりません。何とぞ賢察のほどを！」

荒ぶる主君、セルヴィー侯爵アンドレイを、腹臣の部下ドルンは必死で諫めた。

ドルンとて断腸の思いである。なんといってもイグニスを討ち果たすことは、セルヴィー侯爵家にとって悲願に等しい。

だが、アントリムという火薬庫を餌にして、マウリシア国内の守旧派貴族の取り込みを図ろうとしている今、正面からコルネリアスに侵攻するのはデメリットが大きすぎたのである。

「あの辺境がなんだというのだ！ 今の兵力差なら、すべてはコルネリアスを突破してしまえば解決するではないか！」

憤懣やるかたなくアンドレイは叫ぶ。

バルドを代表にした新興貴族と守旧派貴族の対立を煽り、マウリシア王国の弱体化を図った策謀がこんな反動をもたらすなど、予想もしなかった。

よりにもよって、なんとというタイミングで妊娠してくれるのだ。どこまでいっても不快な女よ！ 理不尽な怒りにアンドレイは駆られたが、さすがに一侯爵家の独断で戦端を開くことはできない。

「口惜しいが、陛下のご聖断にお任せするしかないまい」

未練を振り払うように、アンドレイは乱暴にソファに腰を下ろした。

ほっと一息ついたドルンもまた、主君の口惜しさを共有して唇を噛みしめていた。すでに王宮がアントリム討伐に傾きかけているという情報を得ていたからである。



セルヴィー侯爵家で主従が切齒扼腕する数日前のこと。

ハウレリア国王ルイは、サヴォア伯爵から届けられた魔道具の映像に固唾を呑んでいた。

「これがあのアントリムだというのか……？」

ルイの知る限り、アントリムは牧歌的な片田舎のはずであった。

しかもハウレリアとマウリシアの係争地ということもあって、何度も戦火に焼かれ大きな産業が育たずにいた。地政学的にハウレリア王国の中央部を窺う要地でなければ、誰も見向きもしない不毛の地だったろう。

ところが目の前に映し出された映像の中には、見るからに堅固な防御陣地と、予想を何倍も上回る常備兵力があった。

アントリムに新しい子爵として赴任してから半年余り。いくらバルドが天才的な内政家であったとしても、ありえない変化だとルイは思った。

「……ゆゆしき事態でございますね」

絞り出すようにそう呟いたのは、宰相のモンテスパン公爵である。

今年三十四歳になる若き宰相は、ルイとともに悲願であるマウリシア王国征伐を推進する中心人物であった。

対マウリシア王国戦の要は時間との勝負だと知っているだけに、アントリムの要害化は決して見過ごすことのできない問題なのだ。

「ふん、たかがこの程度の兵力で我が軍を食い止められると思ったら大間違いだ」

つまらなそうに鼻を鳴らすのは、軍務卿のリュビニー公爵である。

「防備に手をかけていることは認めよう。だがこの程度で防衛できると考えているのなら自信過剰もいい加減にしろ、と言ってやりたいところだな」

初めて見る有刺鉄線や塹壕は、確かに厄介そうに見える。

しかしアントリムに侵攻する兵力は、アントリムの総兵力の十倍ではきかないのだ。

数の暴力に抵抗するには、有刺鉄線や塹壕はあまりにも頼りなくリュビニー公爵には思われた。

「ここで損害を増すと後の戦略に障害が発生します。アントリムなどで何千もの兵を消耗する余裕は、我が国にはないのですよ？」

モンテスパンが念を押すと、ルイが補足する。

「苦戦することも余は認めぬ。鎧袖一触でなくては日和見どもは動かぬからな」

アントリムが陥落すること自体は、この場に集まった閣僚の誰ひとりも疑ってはいなかった。

問題なのはただ、そこで浪費される時間と兵力である。

ハウレリアの国家戦略は、今も昔もマウリシアとの兵力差を利用した短期決戦であった。

経済力、農業生産力、工業生産力の全てでマウリシアが勝る現状、人口と兵力で勝負する以外に

ハウレリアに勝ち目はない。

「このアントリムの増強……宰相はどう見る？」

ルイの下間にモンテスパンは困惑した表情で、自信なさげに答えた。

「我が国とマウリシア王国が開戦する場合、アントリムはいつも真つ先に攻められる土地ですから……ここを固めるのは時間稼ぎとしては間違っています。しかし、いかにも非効率的すぎるという懸念はございます」

アントリムは三方をハウレリア王国に囲まれた、いわば袋の鼠である。わざわざ巨額の投資をして守るには、効率が悪すぎる土地だった。

「軍務卿はどうだ？」

「腑に落ちないことは確かですな。しかし少なくとも、この指揮を執っているのはアントリム子爵で間違いありません」

「ウェルキンの指示ではないのか？」

「資金は提供されているのかもしれませんが、この防御施設からはこれまでのマウリシア軍の色が何ひとつ感じられませんので」

両国とも長年敵対しているだけに、お互いの手の内はある程度見通している。

リュビニー公爵は、アントリムの戦略思想がどこか異質であることを感じ取っていた。

もっとも、それはあまりに素人くさいという意味でしかなかったが。

「では尋ねる。アントリムをどれほど陥とせる？」

「被害さえ惜しまねば一日で、そうでなくとも三日もいただければ」

「その言葉、嘘はないな？」

リュビニー公爵はいかにも心外な、と言いたげに目を丸くしてみせた。

「陛下におかれては、どうか我が国の鍛え抜かれた兵士たちを信じていただきたい」

平和にふ抜けたマウリシア王国と違い、常に臨戦態勢にあったハウレリア王国軍は、兵の練度で圧倒的にマウリシアを上回る。

戦力に絶対の自信を持つリュビニー公爵は、あれしきの施設でアントリムを守るはずがないと確信していた。



ハウレリア王国が兵の動員を開始した、という報告はたちまちマウリシア国王ウエルキンの知るところとなった。

どこの国もそうであるが、常備兵力として養うことのできる騎士の数は限られており、限定的な紛争であればともかく、本格的な戦争となれば平民から大量の兵を徴兵しなければならぬ。

農業国で人口密度の低いハウレリア王国では、この徴兵は大々的にならざるを得なかった。

「――予想の範囲内、というところか？」

人の悪そうなウエルキンの笑みに、ハロルドはため息をついて首を振った。

「いえ、予想以上です。おそらくは我々が考えていた以上に、我が国に巣食う病根は深いかと」

もともとバルドを餌に反国王派を釣り上げるというのがウエルキンの目論見であり、マイルトン家を足がかりとした一連の騒動は当初から監視下にあった。

すでにマイルトン家に同調し、アントリム子爵家排斥に動こうとした貴族は不穏分子としてリストアップされ、内偵が進められていた。

しかし、ハウレリア王国のあからさまな反応を見る限り、もっと多くの内通者がいる可能性が高かった。

「ボーフォート公爵はどうしている？」

ウエルキンは十大貴族の長老にして、かつての筆頭貴族でもあった老人の反応を尋ねた。

王国でも影響力の大きい十大貴族の一角が、本格的に反旗を翻せばその影響は計り知れないものとなる。

何かとウエルキンに批判的なこの守旧派貴族の黒幕が、どの程度覚悟を決めているかによって、

ウエルキンの方針も大きく変わるのだ。

「ヘイスティングス伯爵らと頻繁に連絡は取り合っているようですが……少なくとも軍に動きはないかと」

かの公爵が、謀反の先頭に立って決起する可能性は低いであろうと、ハロルドは考えていた。

そうしたリスクに立ち向かう気概から縁遠いからこそ、彼らは王国の発展についていけない守旧派となるのだ。

「おそらくは戦況を見て、去就を決めるつもりでしょう。緒戦に敗れると危険ですね」

彼らがマウリシア王国に対して、まともな忠誠心など持ち合わせていないことを、ウエルキンもハロルドも先の戦役で思い知らされていた。

あのときの無秩序な貴族たちの暴走を、ハロルドは忘れることができない。

そんな若き日の屈辱を二度と味わわぬために、様々な策を講じてきたつもりだが、それは甘くはなかったか？

迫りくる軍靴の音を前にして、ハロルドはそう自問せずにはいられなかった。

「危険なしに国を変えることなどできるものか。そう心配せずとも、あの戦役を繰り返すことなどありはせん」

「……根拠をお聞きしても？」

陰謀を企むことはあれど、内面は甘い夢想家である国王に、宰相としては問いただしておく必要

がある。

「ハウレリアの第一手がアントリムであることは確実だ。考えてもみよ、アントリムの小僧がやすやすとハウレリアにいたぶられるか？ ましてあの男には、敵も多いが味方も多いであろう？」

かつての戦役で一族郎党全て滅ぼされてしまった先代のアントリム子爵は、領民思いではあったが、指揮官としては無能であった。

だがバルドは、そうした平凡さとはもともと縁遠い人物だ。

少なくともハウレリア王国軍のど肝を抜く程度のこととは、軽くやってのけるに違いなかった。

細部まではわからなかったが、バルドがアントリムで進めている防備の拡充が、常識を一步も二歩も踏み外したものであることは想像に難くない。

「過度の期待は禁物です。アントリムの兵力では、ハウレリアの精鋭を相手に善戦することはできません。勝利することは難しいでしょう」

「相変わらずつまらん奴だな。十倍以上の敵を蹴散らして勝つかもしれんじゃないか」

「勝てなかった場合を考え、有能な家臣を無駄死にさせないのが我らの務めです。面白がるのは勝ってからにしてください」

演技とも本気ともつかぬ様子で肩をすくめる国王に、ハロルドは冷たい声で釘を刺すのを忘れなかった。

勝つための布石は打ってきたつもりでも、想定していたより開戦の時期が早くなりそうだ。

バルドという異分子の登場が、果たして吉と出るか凶と出るか。戦うからには負けることは許されないのが、国王の懐刀としての使命である。ハロルドにとっては眠れぬ夜が続きそうであった。



ハウレリア王国軍には七つの騎士団が存在する。

マウリシア王国が所有する四つの騎士団の、ほぼ倍の規模を誇る精鋭であり、ハウレリア王国がマウリシア侵攻のために鍛え上げてきた切り札的な存在でもあった。

そのひとつである蒼竜騎士団の団長を務めるのが、先の戦役で戦死したソユーズ將軍の息子、ボロディノ・ダンピールである。

父に似て非凡な戦術眼を持ち、部下を心服させるカリスマに溢れた彼は、ハウレリア王国軍の次代を担う一人として期待を集めていた。

しかし彼が武の名門ダンピール家の当主で、名將ソユーズの後継者であることを考えれば、その地位は不相应に低いものと言わざるを得ない。

騎士団長とは、將軍の地位から二段階ほど下の戦術指揮官である。

父ソユーズが次期軍務卿として、軍の最上位に立とうとしていたのに、なんとという零落ぶりである。

ることか。

それと思うと、ボロディノは腸が煮えくり返る思いだった。

あの運命の日、世界でもっとも物騒なコルネリアスのひと番によって首を落とされるまで、ソユーズはハウレリアに連戦連勝をもたらし、名將の名を欲しいままにしていた。

そんな父が誇らしく、自らも立派な軍人となることを志したボロディノは、入隊直後の訓練先の営庭で、父の死の報告を聞いた。

「嘘だっ！」

信じられなかった。誹謗中傷の類であってくれ、と祈りもした。

しかしソユーズが乱戦のなかで討ち取られ、味方が壊滅的な被害を被ったことは紛れもなく事実であった。

勝利の立役者として称賛と尊敬を集めてきた父は、一転して敗北した無能な指揮官となった。

これまで父に阿るようになどわりついていた人間たちは、手のひらを返したようにボロディノを非難した。ソユーズは軍人としてあるまじき暗殺に手を染めたため、軍神の怒りを買ったのだ、と。後日、父が銀光マゴットの暗殺を企図したことを聞いたボロディノは、父らしい合理的な策であると首肯した。味方を無駄死にさせることを何よりも嫌った父であればこそだろう。

作戦は奇をてらうことなく、あくまでも愚直に合理的。そして負けない戦心がかかることにかけて、父以上の指揮官をボロディノは未だに見たことがない。

すべてはあの銀光と、イグニス・コルネリアスがあまりに規格外すぎただけなのだ。
今こそ父の汚名を雪ぎ、因縁に決着をつける日がやってきた、とボロディノは信じた。

「腕が鳴りますな、団長殿」

副官のモーリスは、ボロディノの静かな闘志を誰よりもよく承知していた。
もともと彼は、ソユーズの代からダンピエル家に仕える古い部下である。

落ち目のダンピール家を人々が見捨ててゐるなか、忠誠を尽くし続ける数少ない家臣でもあった。

「相手が息子^{バルド}というのが残念ではあるが……やるからには圧勝して格の違いを見せつけてやる」

語気も荒く断言するボロディノの宣言は、決して自信過剰^{かじょう}というわけではない。

軍事力の再建を優先したハウレリア王国の軍は、質量ともに、経済復興を優先したマウリシア王国を明らかに超越している。

兵力の数や、士気の高さ、練度もさることながら、武装や馬の品種にいたるまで、その違いは様々なところにまで及んでいた。

「ソロバン勘定^{かんじょう}だけで戦争などできぬことを教えてやる」

一般的なハウレリア軍人の評価として、軍事費を削り、経済発展のため投資に予算を割^きいてきたマウリシア王国に対する採点^{から}は辛い。

経済力は国力の重要な指標ではあるが、軍事力の裏付けのない経済力は敵の餌にしかない、

というのが、一般的な常識であった。

せっかくの美味^{おい}しい果実も、敵国に占領されてしまつては何の意味もないからだ。

「ダンピエル団長閣下、フランドル將軍より伝令です」

まだ十代の若々しい従騎士の少年が、ボロディノを指揮する上官の命令を伝えた。

今年四十八歳になる上官——フランドル將軍は、父ソユーズの副官を務めたこともある叩き上げの実戦指揮官である。

動員された新編の二個師団に加え、三つの騎士団を率いるアントリム侵攻軍の司令官として拔擢^{はってき}されただけあって、統率力^{しゅうりつりき}と果敢さに定評のある人物であった。

「すぐに向かう」

復権を狙うボロディノにとって、同じ騎士団の団長たちは手柄を競うライバルである。まずは軍議でフランドル將軍の評価を得て、先鋒^{せんぽう}の榮譽を獲得しなくてはならなかった。

ハウレリア王国軍務省は、王都から北へ三キロほど離れた場所にある。

重厚な大理石をふんだんに使った巨大な建造物が発する威容^{いよう}は、下手をすると王宮よりも迫力を感じてしまうほどだ。

ボロディノが到着したときには、遠征軍の主要なメンバーはすでに軍務省内にある会議室に集まっていた。

フランドル將軍を中心に、その右に首席幕僚しゅせきばくりょうのバルノーが陣取り、二人の左右に白竜騎士団長と黒竜騎士団長が座っていた。

ただでさえ殺伐さつぱつとした雰囲気の中、軍議の席に着いたボロディノは、フランドル將軍が思ったより険しい表情を見せていることに、内心で首をかしげた。

フランドル將軍は、本来陽気で攻撃的な指揮官である。

こうした軍議においても、自ら進んで積極的な運動戦を主張することを、かつて部下だったときもあるボロディノは知っていた。しかし――。

「今回の先陣だが……民兵に任せることになるだろう」

「そんな!? 承服しょうふくできませぬ、將軍！」

激昂して抗議の叫び声を上げたのは、白竜騎士団の団長であり、ボロディノのライバルでもあるマッセナ・ランバードだった。

久々の対外戦という晴れ舞台に、騎士団が民兵の後塵こうじんを拝するなどあつてはならない。

ボロディノもまた、この点に関してはライバルに完全に同意する。

「アントリムの攻略は速戦即決が基本であつたはず。一刻も早く突破しなくては溪谷けいこくの出口を塞ふさがれますぞ！」

アントリムを攻略することは何も難しくない。

ボロディノもマッセナもそのことについて、いささかの疑いも持たなかった。

問題なのはアントリムの先にある隘路あいろの溪谷を塞がれると、進攻が著しく困難となることである。

溪谷の出口はフォルカーク准男爵領であるが、そのすぐ背後に精強で知られるブラッドフォード子爵が控えているためだ。

「アントリムを以前のアントリムと思っていると、足元をすくわれるぞ。これを見ろ」

そういつてフランドル將軍は、先ほど軍務卿から渡されたアントリムの資料をテーブルに放り投げた。

魔道具による鮮明な画像に、ボロディノたちは大きく息を呑む。

「こ、これは……」

「いつの間に……」

初めて見るとはいえ、アントリムの防御施設の脅威が理解できないほど、二人は愚かな指揮官ではなかった。

「……これを短期に突破するのは至難しなんの業わざかもしれませんな」

そう言葉を発したのは、騎士団のなかでも最年長の黒竜騎士団長、ランヌ・ベルナルである。

口数は少ないが、どんな困難な任務でも黙々と果たす献身的な粘り強い用兵で、騎士団のなかでも一段高い信頼を得ている男であつた。

「マウリシア王国との戦いは、時間が勝負となることは卿けいらも承知のことと思う。まして敵中に孤立したアントリムごときに苦戦した、ということになれば、マウリシアの士気は上がり、何より